506
162

806-162

橋爪健詩集

# 午前の愛撫

九十九書房刊

1922

大正
11. 7 7
内交

## GEBET

Herr! schicke was du willt,
Ein Liebes oder Leides;
Ich bin vergnügt, dass beides
Aus deinen Händen quillt.

—E. M.—

— PAGE FOR YOU —

— PAGE FOR ME —

# 途上言

——序の如く

穉くとも私の切實な希求を舒べようなら——
神と偕に劫初に在りし道にまで
私の顫慄する本能の息吹を深め
田舍出の體感と又都會風な感覺とに依つて
現在る道をば其の最頂に於て生かし
直覺と智慧との若々しい圓舞から
正視的移展と玄怪な飛躍とを以て

在るべき道へと手を伸べたい——
斯くてこそ
私の傳統は血脈の裡に喚び返され
私の末來は双眸の奥に凝視され
盡くるない「瞬間」の珠數玉を徹して
私は生きるのだ
個の生命を創りぬくのだ
茲にこそ存在理由の力點を打ち込む私の詩！

一九二二年初夏　　橋爪健



## 詩集午前の愛撫内容


轉期に於ける作品……一
掌上の庭……三
隕石……七
Ⅰ天體圏……七
Ⅱ夢……一一
Ⅲ回情……一四
潮と都會人……一八

界限……二四
雨……二九
多神の夜……三四
ある幸福……三八
鋪道思慕（ペーブメント・ラブ）……四三
　I　朝……四三
　II　午後……四五
　III　宵……五〇
褥……五三





顔……五六
處女懷胎……六一
最初で最後の會合……六四
凪……七〇
唄……七三


## 譯詩數章


……七七
菫（ア、サア・シモンズ）……七九
　I　ぷれりうど……七九

Ⅱ くりすます前夜……八二
Ⅲ 告……八四
Ⅳ 唄……八六
Ⅴ 齢 二 八……八九
Ⅵ チムブルにて……九一
春（エヅアルト・メリケ）……九四
羇旅（おなじく）……九八
孤獨（ライネル・マリア・リルケ）……一〇一
豫感（おなじく）……一〇三



**海を見るアキムボオ**……一〇五
海を見る Akimbo……一〇七
かゝる夜と地圖……一一二
後……一一七
詩である處女……一二二
友情へ……一二七
パレットを持つ少女……一三二

影と幻との對話……一三五
故土の聽耳……一四五
故土の聽耳……一四七
遺　涙……一五〇
野の胎教……一五三
贈　物……一五六
昧爽の月……一五九



撰……一六二
日本アルプス韻律……一六五
Ⅰ　梓川牧原に沿うて……一六七
Ⅱ　燕岳に與ふ……一七二
Ⅲ　雪滑りの詩……一七五
NOTTURNO……一七九
1　丘……一八一

2 傷心……一八二
3 ギタールを奏きつゝ……一八三
4 をとめ……一八四
5 秋夜情譚……一八五
6 月光に浮ぶもの……一八六
7 夜を訪ふもの……一八七
8 Silhouette……一八八
9 送迎……一八九
10 悔……一九〇
11 まぼろし……一九一



12 焦燥……一九二
古囊新愁……一九三
詩人と少女……一九五
Adieu!……二一四
戀てある幻影（散文詩）……二一七

〔内容畢〕

# 午前の愛撫

## 序詞

われらが歳は午前
われらが詩(うた)は思慕
聽て
尻(ひけ)は渉り
想(おもひ)は孵る
然し
今はしまらく殉情の
君が愛撫に身を任せよう

# 轉機に於ける作品

—1922—

## 掌上の庭（起唱）

—北村初雄氏に

洋に音なく旋ひたつ魚の
皎き胸よりも軟かに且纖けれど
戀人の掌の
庭の宏やか。

女性の指ゆえ差ゆげに結える牆の外に
永き日をわが佇ち呼びしが漸くに
匂やかなる應辭をもちて微風は來り
「春」と軋りてその庭の扉のひらかれしなり。

然なり春とはいへどわが眼を瞠りし
珍らかなるこの苑のいまだ寥しく
疎らに布置よき灌木の
仄に翳せるはベルス・ネエジュの花なりき。



そは地と速く天と目敏く春を識り
慎しやかに眼ざむる花
さなり君が心も。

かくて噴泉に慕ひよる牡鹿よりも胸充ちて
わが歩み入りしその日より
季更まり
樹皮は割れ、蕾は音たて、飜ひ光る翅の群。
かく日を列べ

奏づる春に——

日もすがら
飽かず凭りそふ佳き長椅子の談らひを
饒みゆく葡萄葉は斑らなる景をもて暖め
盟約の後の指をば伸して平らかに
さし示したる君その掌の明るさは
ふたゝびも
人虚く語る戀の園生を想はしめぬ。



# 隕石

埋れたる歎きの石ぞこゝだくの星と並み
けむわれならなくに——序歌

## I. 天體圏

節と偕に循り
律と俱に佇り
私たちの天の歩みの靜けさを
陽と微風とが裹んでゐた。

禍災を固より識り
嵐をば素より浴びた
しかし内在なる昂き愛とともに
其處にあつた犯し難い天なる若さ。

花のやうに咲くことより
蟲のやうに醉ふことより
何も知らない私たちの生活を
天は支へ地は共鳴り、神は嘉した。



四順の季節は幸福をば繰りかへし
地の歡びこそ天の悅び！
それは恰も深い水に映る空の象が
上なる天と些の異りも無いかのやう。

饒る地を眺める、心は熟り
睦みあふ人らを側へに感じ
又殊に夜の甘美を撰り慕うて
微かに耀きつゝ擁き交はした我等。

あゝかくて圏は燁らけく
豊かな運行に載つて和かに
處女航の私たちの生涯は展け
宇宙が二つの胸裡に生き生きてゐた。



## II. 夢

見覺えのある指先が纖々と
ふとも顯れ
小さな氣泡に觸れようとする
泡は逃げる、水銀の粒のやうに
すると何處ともしらず
似通ふた皎い手が數なく現れ

趁ふ追ふ、遁げる泡を

天と地の
柔かい繼目——

落ちのびた泡はほと吐息し
勞(つか)れ　涙ぐみ　ふと
最初の指へのMissに襲はれた刹那

音もなく



虹色の胴は裂け
たち騰る生暖い蘊氣(うんき)——

## Ⅲ. 回情

その時　轉落した私を
山深い一叢の草株が抱きとめてゐた

何年か何十年か
今眼ざめて
何萬か何億里か
再び地から瞻る天なる故郷



併し「隔てるものは時限ではなく
離れるものは空間ではないのだ。」

あゝ今昧爽近い深山に眼を瞠き
躰は石化の嚴しさに感覺もなく
額まぢかな星座を眺めやりつゝ
回望の涙さへ氷らうとする

憶へば戀の天圏に酣うてゐた私が
夢にみた初戀の女像に惱まされ

とり亂し踏み誤つた一階の律から
無殘に烈しく蹴落し去られた

斯くて、在りし情熱は痕もなく消え
おゝこの嘗てない理念のみ
今は石よりも冷かに恁う曰ふのだ——

彼女とこれとを隔てるものは
返し難い此の無窮の時劫でも
又は復しえぬ此の杳かな空芒でもなく



たゞ、一つの泡の割れる響の
その幽かな背信の魂こそ
かくも遠くかくも致命の
生きながらの宿業を喚び招き。」

遂には不動と無言の永久の苛責に
審判も未來もない土壌の末に埋れはて
いつの日にまで置き去られるのか
その昔の天なる星。

# 潮と都會人

（ほら、あの匂ひ！）

汽車を棄てゝから小半時
やゝ歩き疲れた感覺にさへ
瞭らかに
遠寄せてくるものゝ氣配



（さう、あの匂ひ……）

國道を右に折れるや否
二人は眼を見合つた
果して
疎らに匍匐ふ松林の後姿が！

（ほら、潮の匂ひね？）

女は聲を昂げた

薄暮である
杳かな響の末のやうに
風に融けてゐるあの匂ひ

（さう、潮の匂ひだ！）

男は應けながら寄りそうた
あゝ何といふ懐ましい
忘れがたない芬香！
久濶に聽く故土の寢息のやう。



おゝ、海の臭ひ
裸の匂ひ
碧く鹹い
魚と藻草と舟の匂ひ
少年の日の夢を孕ませた帆の香
青年の日の情を煖めた砂の香
海の記憶はその潭のやうに深くありながら
又、消えゆくその漣のやうにも淺いためか……

いつ知らず
都會は海を忘れ
人はその匂ひに餓えながら
かくても世は經ち、環つてきた

あゝ今
陽の温味を殘す砂丘に辿りつき
翳おほき刺繍のやうに疊はる波を眺めつゝ
相愛の二人
はるか都會の騒音を振りかへり



其處の眩暈しい經緯を解きほぐさうとて
飽くなき匂ひに
躰を涵せば——
遠く
幽かに
光芒を旋らす
名も知れぬ燈臺。

# 界隈

足が私を運び慣らし
いつか識り初めた
一つの霧圍氣

其處には風がある
私を麾くものは、しかし
風ではない



其處には匂がある、しかし
私を誘ふものは
匂でもない

其處には景がある
私を惹くものは、しかし
景ではない

其處には人間もゐる、しかし
私を惑すのは

たゞ人間でもないらしい
暇さへあれば脚はさし寄り
忙しければ忘れたやうに見え乍ら
片時も絶えず思戀は向き
あゝ然うして日毎夜毎
失くしたものを求めるかのやう
彷徨ひ、覗き、佇止まり



闇の裡なる柱よりも耳鋭く
耳朶を欹て
聽きとり難い聲を分け
又は地を掻く狗のやうに
苛立ち、焦燥り
源のない臭を趁ひ
又は雪の夜明けの餓じい鳥にも似て
眼は驚異に啼くけれど

獲るものとて無い哀しみに樹に蹲り
あゝ斯くても欲願は飽くことなく
満ち足らず又竭くる機なく
明け暮れ

思慕が私を搬び募らせ
今は、去りがたく自に即く
一つの界隈。



## 雨

夢から夢へ渉されるかのやう
私が假睡から眼ざめ
とある疎林のふところ
何かの跫音を聞いたのだ

漫歩の勞れは、轉びよい芝草を見て怡み
いつか眠りに陥ちたときその時は

班らの陽炭が
可撓かな腕のやうに、身に温みを懸けてゐた

その時を想ひ出すには、いちまいの
紈の、その弛みがちな一張りを
裂かねばならぬかの程に遠く又近く
私はその時のことを憶えてゐる

「然うだ、然うであつた」
確かに又覺束なくその時を



わけもなく現在に比較べつゝ私は
何かの跫音を聞いたのだ

何かの跫音を聽いたとき
嬰兒を寢せて乳母の虔しく去つた後のやう
あの時の胸の暖みを思ひだし
同時に、ある冷たさが五體に滲みた

何かの跫音を聽いたとき
微かなその響は　私を

揺り起すやうにも又劬すやうにも思はれたが
唯執念に、寒冷が私を目ざましたらしい

何かの足音を聽きながら
しかし私はまだよくは醒めなかつた
潜んでくる情夫に身を任せるかのやうな
私の環境の、さゞめかしい氣配を感じつゝ……

何かの足音を聽き了り
今は起き上つて見定めた



それは、眼内には煌くやうにも見え
遠くは樹々を透して烟るやうに見え——

そこで私は彳ち直つた。
夢を、痺れた咽喉にぐつと呑みこみ
頼りない兩掌の感觸に
濕つた上衣の裾をやゝ搾りながら——

# 多神の夜

躁宴に獨り連なる寥しさは　私を
春とはいへ夜氣嚴しい戸外へと遁れさせ
嘯席の綺羅べる景を振りも返らず
三月の夜深き家路にと身を裹ませる

雨を孕み垂れたる蒼穹には星月の光體とてなく
默禱のごとく差手する樹々に沿ふ歸路



自づと秘めらるゝわが跫音は
抱きあふ人らの臥床の側をゆくかのやう

あゝかゝる夜神々は姿を窶し
今もなほ下界を慕うて潛び降り
貌よい女人の展かれた胸々は
業卓れたる胤を享くるであらう

まことに斯かる夜こそ地は伸び上り
見えざる精子は天より通ひ

生くるものとて無いかのやうなこの寂謐を
おごそかなる交歡の聲々が盈してゐよう

若し地に戀人あつて私を待つならば
貴女こそ、その唇に神々の齒型を宿し
神々の聲を識り、その血を遺してあれ
操なき受胎を、併し私は劬るであらう

あゝこの宵の　實に神秘な情景こそ
常には閉された或る世界への默示か……



仰信淨く篤いかのエホバの使徒さへも
見よ、この汎神の微燿には眩むであらう

# ある幸福

夜だ、永い夜
歩く歩く涯なさ！
疲れた四肢を闇に振ると
絶えず
虚空にも
身に逼つて、觸れる「生活」
だき緊める、明日へ！



お、聲が
何處からか近づく呼聲！

あゝ
あゝ
この幸福が胸をしぼる

一人だ。耐えつゝ
持てあます、軀の熱さ！
組んだ兩掌を噴泉に涵すと

零れ満ち、光る「約束」
ぐつと飲む、未來へ！
ふと感ずる
傍に佇つ人の翳像！

あゝ
あゝ
この幸福が咽喉を攣る
孤獨の俺



泣くのだ
不幸な俺
泣くのだ

お、闇に動く白い手
忍從に、顫へる肩を
宥められ
俺はかなしく
なほも滾る、涙。
擧げようとする大聲が

聲が、壓(の)され

あゝ
此の
斯ういふ
幸福
今も
俺の聲を鎭めるのは！



# 鋪道(ペーブメント)・思慕(ラブ)

——山崎泰雄に贈る

## I・朝

朝々の記憶が
街路の呼聲が
蝕(し)みいる快適な睡魔からさへひき醒まし
今朝も晴れやかに身を整へさせ

さて豫想の洪水に溺れつゝ
かの華やかな晨の舞臺に登場する
私もまだ若い學生の一員だ

陽は斜め——

おのおのゝ急ぐ課業を持ちながら
混みあふ電車を送り眺め
しばし見知らぬ「偶像」の群に入り交り
昨日と今日との眼つきを量り



人より人に較べ移り
あゝさうして瞬く間に過ぎゆく時を
まだ見ぬ戀に醉ふ田舍の織女のやうに
この都會の若い未來者たちは
失望の經と豫歡の緯とを
朝な〳〵織りすゝめつゝ
かくて
かれらの一日を起し
かれらの一生を起し
かれらの時代を起すのだ

## II. 午後

無心に紐を把る校僕の手に
けたゝましく鳴る放課の鐘は
懶い午後を喚びさまし

少女の心と
青年らの心とを
遠く暗默の裡に牽きあひ頻笑ませ



第二の朝のやうに稍ときめかせつゝ
各自の校門は一樣にひらかれ
甦へつた心を家路にと送りだす

陽は仲空——

朝の服は弛み、顏は汗ばみ
然し一日の授業と運動とは
かれらの靈を肥やし肉を輝かし
疲れよごれた衷にこそある青年者の充實！

鋪石を彈く靴の音に吾(われ)と醉ひつゝ
ふと擦れちがふ紫紺の袴、　高い踵
見るとなく交はる双の眼差は
見覺えのあるかのやうに底深く笑み
又は小さな「思慕ゆえの叛逆」に
つと眼を翻(ひるが)し濟まして見入る窓飾(ショウ、ウインド)
あゝそこに映る若い像こそ
お互ひに自分であり又「君」のものだ

相寄る思慕は感じ易い觸手のみを合せ乍ら



然し何といふ嚴しい不可見の規(おきて)に遮られてゐるか！
けれど見よ、鏡の中に二つの隔つた姿が重なるやうに
陽の盛(さか)りの惱ましい街路の雰氣は
そこに、卽(つ)かず離れず永久に新鮮な
「同時代者」といふ
赤い幻燈(シヨウチウ)を寫すではないか！

## Ⅲ. 宵

いつか市にも平らかに灯が這入り
長い影をもつ睫毛の群にも似て
その青い灯の遠く透く秋波は
食後にも倦んだ家々の隅から
又しても動き易い血を魅きまねき
女は袴を脱いで夜の帶を締め



男は制服を捨てゝ夜帽を冠り
主ない假空の名を心に喚び
呼ばれないわが名に應へ
おのづと釀す匂ひに酣ひつゝ
「約束」を美しく盛るかのやうな往還を
ゆき通ふ
あゝこの近代の若い男女には
晝の燈よりも夜の太陽が
相應しく且つ親しみ深いかの程に

彼等は何と綺羅びやかな浮彫姿を夜に持つか！

かくて見よ
名も無い水に蟲の孵つては又死ぬやうに
覺えては消え去る儚ない戀を
その儚なさゆえに趁ふか街の子ら。
然しいつかは疲れはて誰ともなく
おのがじじの暗い小徑にまぎれ歸り
さびれゆく鋪道には風も通らず
奸計の灯のみが蒼白く苦笑ふ。



# 褥

（或は床中の Pygmalion）

聖卷の
とある頁とひろやかに
わが褥に餘白あり

かれ

劫へに虚しく、而も
無聲の相を盈せども

春宵
秋更
わが彫る影像はいつの日に……

あゝ彫るよ刻るよ
眸の移香
唇の痕



素材は男人の肋骨よりも生きたるを！
貌杳かにして又眼内にせまり
未完の像は傍なる餘白に在るを
手の稈く
夢みるはLotteの影繪か終夜を勞れ疲れ。

# 顔

おのゝきおのゝき、かれ
わが唇にくちづけぬ
ガレオットなりしよ
書も作者も

（神曲地獄編第五曲）

窓なれば
しぬびいりし後姿
ガレオットなりけり



眼ざしこそ

（誰？　ぼくをこんな處に拋りこんで、どうしようつてんだらう。　暖かな潤つぽい穴だなあ、　涙が匂がする。　なに「瞼の扉」だつて？　開けてみよう。　あ！　なんて綺麗な庭！　箱庭みたいだ、　おや、　ヂャンの聲がするぞ。　なんだ、　おまへもお隣りの穴に投げ込まれてたのかい、　不思議だなあ、　速く出ておいで、　ヂャン、　ヂャン！　さうしてこのお庭を見て御覽！）

白午の永き談らひは

女身の眉を假睡に誘ひ
仰向ける夢をかろくも載せて
光れる長椅子

（さあ行かう、歩いてみよう。ヂャン、お氣をつけこの芝生の滑らかさつたら！ほら、そこの石刀柏の茂みを踏まないやうに、あの杜蔭の平地で霎時憩まう。佳い眺望だなあ、ね、先刻の穴の彈機仕掛の扉が、まん圓く閉つてるだろ。さ、ヂャン、もう立たう。そしてあの紅い花のいつぱい咲いてる園の間の細つこい築山まで、一息に駈けつこしよう！）



ふとも寄せくる葩の薫は遙かなる
故土を懐はせ
はるかなる家こそは眼下なる
双唇。

（はやく早く、ヂャン！こんな所に、築山の蔭に、朱い鞦韆が双つあるぜ。微風もないのに、ほら、時々搖れてる、搖れてる、搖籃みたいに、ね、憶えてる？もう先、田舍のお家で、ママに載っけて貰つたつけ。乘りたいなあ、叱られるだらうか、いゝねヂ

ヤン、誰もゐないんだもの構はないや、乗らう、一
緒に飛び乗つてうんと揺すらう。さ、一、二、三！）

——まあ、貴郎？
いま好い夢をみてたとこなのに
びつくりしちやつたわ——



## 處女懐胎

陽は昇り陽は下り
暦ある指折るにも疲れ
ゆるみがちなる小櫛をば抜きては緊むる
双掌の汗の。

日ならべて肉内にも定かなる
生命を識れど

看るに物なく聽くに聲なく
うごめく邊を差ゆげにも觸れ惱みつゝ
陽は循り——

近寄る鄕路のごとくかの春の
角ぐみくるを睦しみ身を任するも唯
杳き哄笑のありてのみ寄處なく。
さしぐめる記憶の裡より不圖しも慣れて



立つ聲——

おお、今こそ玆に肩ありて昂く
男性の
笑みつゝ怨み泣きつゝ手寄るを豊らに受けて
誓ひ指す像！

耳欹つる春——

# 最初で最後の會合

——三人の少女へ

豫想が私を搖つては押へ搖つては壓へ
さうして絶えず足を急がせるので
ほんのり汗ばんでくる病後の肢體

曲り角
眼をつむつて、骰子を拋るやうに



項を振つて　擲げる眼采

と見る街の一條。そこにある午の光を
吸つては彈く葉のやうに、三人
處女。揃ひの紫紺

いま、振返つて此方を眺め
躱す袖裏に翳る顏。初めての顏
（ふと傳はつてくる光の波動）

なほも盪れる、搖れる、と
歩き出す、泳ぐ身振り
それを趁ふ私の視線、影より速く

解けた絲端を手繰つても手繰つても
はづんでゆく毬のやう
振りほどいて進む三つの後姿

駛け去る家並
落ちこんでゆく坂



然し、變らない彼我の距離

今は疲れ、諦め、佇つて微笑する私
と、彼方もいつか向き直つて坂の高みに
待ち、囁き、崩れる唇を噛んで俯向く眼

（劇の事ですの……）

水銀のやう、寄り集る光。靜かに
その落付いた襞の中に三人が一人に化り

その何處からか洩れてくる聲。羞かしい聲

（五年生の謝恩會に演りますの……）

耐えきれずに含んで顫はす朱い頰から
戯けるやうに、叱るやうに、光線の飛沫
それに擽られつゝ、劇の序幕を浮べる私

（もう歸塾ないと叱られますの……）



少しは狃れて交はす挨拶、永別の辭
長い影が一、短いのが三、動き出す
と逆にほのけて、傾く陽光

（さやうなら！）
（さやうなら！）

名も知らず會ひ、名も知らず別れ
時々オルフユウスのやうに後覗する私
背に反動する忍笑ひ——

# 凪

天を爛らし洋を裂く颱風の、いつか歛り
うち伏した玫瑰の葉をそよがす程に
わが情は
和いだ

巖を衝ち地を搖り魚群を鏖した激浪の
今は渚に小蟹を弄すかのやうに



わが肉は
凪いだ

潮流の隆起にかくされてゐた岬の
復たも平らかな相を顯はすやうに
理念を
擡げよ

帆は千切れ檣は歪んだ船舶の、併し
再　甦へつた欵乃を響かすやうに

勝利を
歌へ

埠頭に近く、鳴り、耐へ、拉がれた防風林の
自から枝を更め葉を整へる營みのやう
靜觀を
鎧へ



## 唄

（街をゆく少女の顔）

吹く風は
あるかなきかに
その風に
撫でられ搖れる　蕾のやうにも
つゝましく　躱すか袂

降る雨は
跫音もなくて
その雨の
名もなき森を　過ぎゆくやうにも
ほそやかに　はづむか踵

湧く水は
盈ちず流れず
その水に
浮いて漾ふ　小魚のやうにも



あてどなく　泛すか瞳

散る花は
あまねく散れど
その葩を
見定めかねる　眸のやうにも
なみだぐみ　眩むか思慕

——A Mlle. I. Yuriko.——

# 譯詩數章

# 菫

（アアサア・シモンズ）

## I. ぶれりうど

こは一茎のあえかに白き野林の菫
わが見出しは彩色ある挿枝の生ふるところ
そは温室玻璃の下、もろもろの花々の
陽の烈しさ風の痛さを忘れ果てたるところ

菫は蘭の色をもち
粧ひいでし嫋かなる美しさは、周圍の花にも異らず
さはれなほその息吹こそは春の息吹
かの野林の心なほその胸内にも生き殘れり

蘭はわがなべて愛づる花
菫、たゞ森に咲く菫ならば
その甘美を傾くるとも、わが血を湧かす
好奇の心を搖るには足らず



然も見よ、茲香を放てる環境にして
唯自然のみが僞物なるところにして
茲に移植されたる唯一莖の菫の裡に
わが理想なる人化の花を見出しぬ

## II. くりすます前夜

四月ごゝろの Violet
われら逢ひしは四月なりしか
冬來(く)といふに、四月の菫ら
なほ去らず

かく、ひと時の幻想は
ゆくりなき陽(ひ)と驟雨(あめ)より生れ



冬をも冒し、胸展き
花さきぬ

## Ⅲ. 告

若人よ、われ君に指輪贈らむ
もし君愛づれば、美し衣をも
君が胸上と髪には花をも
また、君愛づれば、甘き愛撫も

またわれは君に與へむわが日々を
またわれ棄つべし、もし君覓めば



わが夢、わが書、わが常住の道
悅しく贈らむ唯君欲りせば

採れ君がため、わが生わが詩
また君の愛のためにはわれ恕さむ
われたゞ乞ふのみ君なる心情を
そはわれ贈るべき心情なきゆえ

## IV. 唄

唇がなんだろ、接吻されなけりや
眼がなんだろ、愛されなけりや
可愛いゝ手頸もなんとしよ
か細い腰もなんとしよ
そなたの髪毛の柔軟さへも
様を絡めにやなんとしよ



唇がなんだろ、接吻されなけりや
眼がなんだろ、愛されなけりや
様が抱いてと欲るものを
きかぬそなたがなんとしよ
そなたのなさけも可憐の様の
心惹かせにや、なんとしよ

これぞ接吻の、好きな唇
これぞ愛撫の、好きな眼
そこで思ふに、もし様が

冬の荒野で蔭失くしや
これこの情が忽ちそこに
様の巣ごもる網を張ろ



## V. 齡二八

昨日、あなたは穉なく、私に睦いた
今日、あなたは婦となり、恐らくは
柔味を増したその眼こそ
戀へと憧れる甘美な傾墮を唆してゐる
誰かいひ得ようぞ、唯私のみが知ることは
われら二人、親睦も接吻も今はなく
そは唯あなたの眉に快い羞ひをば喚びさます

甘やかに、又は惱める薔薇のやうに
とある黎明の際に戰きながら
あなたは起つ、恰も眠りから醒めたかのやうに
「起きて！」とあなたに叫んだのは私
去つた子を再び呼び返したがる私
かくてあなたが私のために失くしたものこそ
あなたをば保たしめるであらう
あなたと同じ眼をもつ女人に逢ふのを躊躇うて



## VI. Temple にて歌へる

Violet が來る時に、私は知らない
多が世界を雪ぐるむのか
又は夏が眞紅に燃えて
前栽なる噴泉を耀かすのかを、
Violet が來る時に。
彼女の花に似た眼と柔かな唇が
春の温味と歡迎とを齎らして

私の室の環りにも、仙女の圈ができ
菫菜が、菫菜が花ひらく
Violet が來る時に

Violet が去く時に、又も聞える
望みも果てた雨の嘆きが
黝みゆく玻璃窓に滴り
冬の涙は虧月の上に落ち
Violet が去く時に。
けれどなほ私の淋しい室を廻つて



幻の菫菜たちは花さき
かくて尙ほ彼女が姿見せれば
わが繰る懶い頁をば匂はせる
Violet が去く時に。

# 春　（エヅアルト・メリケ）

茲春の丘に佇てば
雲はわが翼となり
鳥一羽先だつて翔ぶ
あゝ、その唯一人の戀びとよ
告げよ汝の停る處を、私の停れるやうに！
しかし汝と空氣とは家さへない



陽の花は率爾くわが情愁を展けさせ
憧れつゝ
膨らみつゝ
戀と希望の裡に。
春よ、汝は何を意圖したのか？
何時私は心鎖まれるのか？

漾ふ雲を叉河を眺めると
太陽の黄金の接唇は
深くわが血潮にまでも吻け入り

眼は、奇しく醉ひ痴れつゝ
睡りいるとき
なほ耳を密峰の呟きに傾けさせる

これを思ひかれを想ひ
私は憬(こが)れる、けれど何にかは判らない
半ばは愛慾、半ばは哀傷
わが心よ、おゝ語れ
何を汝は記憶のよすがに
黄昏の金色(きん)の嫩枝に織り込むのか?



――呼び難い在りし日を!

# 羇旅（メリケ）

新たに截つた漂杖に凭り
朝まだき
丘を昇り丘を降り
森を徹して彷徨ふとき
その時、葉にゐる小鳥の
囀り且つ身を行るやうに
又は金色の葡萄の房の



曙の光に
歡喜の精を感ずるやうに
この年舊り愛すべきアダムも亦
春秋の熱を感ずるのだ
聖猛の
不退轉の
天國なる第一愉悅を感ずるのだ

おゝ老アダムよ、嚴正な師らがいふやうに
儞はかくも惡しくはないのだ

儛の愛する造主と支持者を
絶えず愛慕し禮讃し
絶えず歌ひ褒めたゝへること
永劫に新たな創世の日に在るごとく

かくて支持者は絶ゆるときなく
かつはわが全き生涯も
微かな漂泊の汗に濡れつゝ
かゝる晨の旅であるやう！



## 孤　獨

（ライネル・マリア・リルケ）

孤獨は雨にも似て
夕まけて海より騰り
杳かに遠き野より昇り
常に孤獨を持つ天へとゆく
かくて初めて天より市に落ち灑ぐ
間の時にこそ、雨は降りそゝぐ

小徑がなべて朝へと嚮くとき
又、何をも見出し得なかつた肉體群が
寄處なく悲しげに別れ散るとき
又は、悪みあふ人らの
一つの床に眠り寄らねばならぬとき
その時孤獨は流れそゝぐ



## 豫感

（リルケ）

一旒の旗のやうに私は遙より繞まれる
地なる物が未だ動かぬ先に、私は
來ようとする風を豫知しその央に生きねばならぬ
扉はなほ音なく閉ぢ、煖爐は靜か
窓もなほはためかず、埃はまだ重く
此時私は既に嵐を知り、海のやうに昂り

そして心をば張り、自らの裡に陷ち込み
身を投げて全く獨りゐる
嵐の中

# 海を見る AKIMBO

—1921—

# 海を見る Akimbo

——北村初雄氏に

人ひとりありて處女
海ひろごりて午前
望遠する君がアキムボオ

處女うすぎぬの裸身
濡れたる水着を密と吸ふ裸身。

海よりの微風酔ひ恍けてしのび寄れど
まつはるよすがなし、眉滑る裸身。
微風は離れて、砂の淫熱に身もだへ
男性とともに、放情にいらだつ斜視
されど、動かず、海と裸身。

處女、帆のごとき胸。
乳房より腕に、流れ紆るしなやかなる線
腰にとまりて、双つの掌の接唇。
陽は八月、熾んに射しより



うちまかせたる女身を裹めど
顎の翳撫肩に零るゝのみ
ゆたかに搖がず、海と裸身。

處女、貝のごとき瞳。
島は、船は、澪は、媚び狂ふ鷗は
海のもの悉く光りて双眸に群り寄れど
遁ぐる眼差、消えゆく眼尖、
はてなく、あてどなく、憧憬れ貫かるゝ空層。
彼方こそ、見つめ飽かざる處女の世界……

（ああ堪へず、われにむけて
今はあれ　一つの微笑
今はあれ　一つのゆらぎ
微風とともに
陽とともに
海とともに
われ君を抱くべし）

人ひとりありて處女
海ひろごりて午前



かくて崩る君がアキムボオ。

（Akimbo とは掌を臀にして肘を張りたる貌）

# かゝる夜と地圖

たよりない黄昏はふかぶかと深みはて
まつたくの夜である、今は、底知れぬ夜である
白日の激動に、魂はうなだれながら
しかし私の眼かひは、冷酷に冴えすさむ

時を經て眠られぬ心は幾たびも吐息し
闇のかなたを視つめ、夜の彼方を聽きつゝ



ついに惱ましさはふたゝび私を起し
點火された明るいソファに身を沈める

あゝかゝる夜。寥しさに寢はぐれた夜
卓に散らばる紙々から私は一枚の地圖を探し出す
白い燈火は充分にわたりめぐり、おお
大都會は私の眼下！　瞶めがちな一眸の中に！
さま〳〵な線の交錯。記號の列。彩色の變化
おゝそこに、輝かしい都會の文化は靜かに眠り
河の紆り、野の展り、森の深み、縫ひめぐる道

おゝそこに、郊外の自然が美しい胸をはだけてゐる

私の指は河を溯り、細い野路を辿り
胸にはひらけゆく風景の幻が映りつらなる
——とある牧場の高み、疎林の邊に私は彳んで
そこの住みよい一軒屋の生活を趁ひ考へる——

（ある朝のこと）乳鑵をさげて、毎日通る牛屋の娘が
なんの事はなく、私の姿に笑を浴せる
ひとり丘に佇ち、枯枝を折り撓つてゐた私は



慌てゝ部屋に馳けこんで、詩のペンを握りしめる

（ある宵のこと）ひたすらな靜寂の中に醉ひ浸ひつゝ
せんねんに頁を繰り字を書いてゐた私
不圖、遙かな呼聲に熱くきびしく抱きすくめられ
彼女のために、新たな影椅子を買はふと決める

——あゝかくても夜の長さよ、胸の焔よ
いつの機に、どんらんな眼はまぶたするのか？
いつの日に、絶えぬ未來への憔望は歛るのか？

おゝ睡り、眠り、今はせめて甘い眠りをこの苦しさに！



## 後（あと）

女よ今は
解きほぐせ解きほぐせ
おまへの編んだ情事（アヴァンチュル）

男の跫音はもう消えた
したがまだ暖（ぬく）みのさめぬうち
今だ靜かに

絲の盡き切れたこの宵に
死ぬ羞らひで編みすゝんだ
おまへの針のおどる歩みを
解きほぐせ解きほぐせ逆しまに

女よ今は
おまへ獨り。扉ぐちは慥かだ
（動いてゐるものとては
燃えさしの暖爐と
疲れ切つた柱時計だけ）



解きほぐす絲の目に
恥かしい追想が泌みてたら
乳房をつねつて（男のまねに）
にゝと笑つてやるがいゝ
解きほぐす絲にからんで
たとしへない官能が零れたら
（かまはない、おまへ一人だ）
もう一度あの窕かな姿態！

女よ今は

もつともつと解きほぐせ
守つてきたおまへの胸に
息づきはづんで過ぎ去つた夜
侏儒のやうに踊び去つた夜
はづみを覦つて男と諜して
おまへの失くしたかげひのないものを
盗んでいつた夜。夜
その夜は更ける。——

女よ今は



悔むな泣くな解きほぐせ
どんらんに、つゝましやかに
解きほぐす絲の末端には
絡はりついてゐようものを
處女と呼ばれた「あの日」の情感が
(そこでおまへは靜かに想ひ返すがいゝ)——
「あの日に」こそ持て餘してゐた淫らな絲を
遂々おまへは編み切つたのだ
今夜おまへは編み終へたのだ

# 詩である處女

This is her picture as she was:
It seems a thing to wonder on,
As though mine image in the glass
Should tarry when myself am gone.
—Rossetti—

あなたの何げない立像
それは一つの
世にも好もしい詩篇である



水先案内は舷側に佇ち眼を翳す
澪に、潮に
しかし思ひがけない故土の海鳥に涙ぐむ
私は暝い森の出しほに眼くらんだ
光る葉裏に
しかしおゝ、そこにあつたなほも眩しい詩篇！
しばだゝく私の眼。掌をあげて目蔭をしつゝ

せまる思ひに
口籠り口籠りその冒頭の句を誦んだ
花を觀るあなたの立態、斜による
陽は五月。
ふと拂つた袂から搖り零れる光の縞
私はふたゝびも眩めき、眸をいぶかりつゝ。
あゝ一行の詩
今は展げられた數行の句聯



振り返れば、おぐらく長い森であつた
奇異の感に
そこで讀み耽つた諸々の詩篇を回想する
ありとある寂麗な詩章に飽和された私に
しかもこの
かつてない珍らかなる詩篇は！
潤土に落ちた一片の葩の小曲
その詩篇——

それは又時に「故土」と題する交響樂！

あなたの何げない立姿
それは遂に
世にも不思議なる詩篇である。



## 友情へ

無爲なる日は
雪となり夕暮れて
遂には夜を齎(もたら)し

あゝ今宵
床をのべて孤り
ねはぐれて寥しく

かゝる夜に情人(ひと)あらばと
襟よせて呟けど
いだき緊むるよすがもなく

筆ひらひ書きつゞるは
手紙なり。受くる名は
こは、いちにんの女性(にょしょう)。——

「ぼくの享生はおそらくは短いもの



こひゝとの數は指を折るかもしれないが
あなたのやうな女友は一生一人。

「生くる限り涙にひたる僕は淋しい男
戀を望んでは泣き戀を得ては哀しみ
殉じては又もて餘すこの若さ

「戀びとはぼくを溺らすだろうけれど
あなたの愛こそは或る時に劬り
ある時にはきびしい鞭となるであろう

「あなたに竭し得なかつた戀情の償ひに
あなたの友はあなたの兄は、靜かに永く
更によい更に美しい贈物を積んでゆこう

「戀は燃えあがる火花でした
あなたとぼくとは灰の奥ふかく
暖爐を部屋をあたゝめる炭火になろう

「戀びとよ」それにもまして純なる親和の名を
今こそ心ふかくあなたに向つて呼びかけます



「友よ！」

筆を擱いて夜を覗へば
雪は雨となり
さびしけど胸はなごみつゝ

襲ひくる
睡りに搖れて今宵
ひとを思はじ

——松村氏に

# パレットを持つ少女

あるときは光を抱き搏つ葉群のやうに
管は、聲をあげてカンヴアスにおどる

あるときは空に唇づくる鳥屬のやうに
管は、彩具を喞んでエエテルを寫す

悲れる天童の如。熱ふく構想に燒けたゞれ
その焰を噴きはなつ双つの眸



おゝ見よ、その熱氣に射すくめられたる畫板！
意の儘に、男性の如く、嫋かなる處女の息の意の儘に
草を嚙む羊の如。潤はしゆく情緒に醉ひおぼめき
生を育む唾液ひたすらに流れ。紆る筆觸。
おゝ見よ。その温醇にむせび溶くる物象！
思ひの儘に、嫩枝の如く物知らぬ少女の指の思ひの儘に
園子十八。神はおんみに眼を賦へて死ねり

そは、萬人を創るより神の惱み深かりしゆゑ
園子十八。死ねる神はおんみの双眸に生き生けり
ゆゑ、神を見ざりし人ら、その耀きに懼れ睦む
卓上にある一つの壺を看守る眼
と同時に、絶えず絶えず永遠の星を凝視むる眼
あゝその眼眸。その影。戀する勿れ若者
笑ましめよたゞ精靈の秋波、藝術である情人に



# 影と幻との對話

（法科八角大講堂に於ける）

——穗積重遠先生に捧ぐ

## 幻

微風、軟風、何といふ佳い風
外からの風、土から生れ野を傳ふ風
仄かながらも鼻を撫つ、葉の匂ひ、葩の薫

故里の呼聲が、情人の耳語が、おお
あの窓からだ、尠しばかり洩れてくるのだ
もつと、もつと、吹けよ風、開けよ窓
あゝ何といふ堅つぽいけちな風穴だ、あの窓は！
牢獄の軒に見えるやうな、額縁に篏められた空！
儂らの領の景も、娘も、放たれた牝牛の群も
おゝおゝ、なんにも一つも見えやしない
呪はしい角窓、グロテスクな大圓蓋……

## 影



女こそ、情こそ、詛はしい誘惑だ
儞は夢を見すぎてゐるわい
そんな空つぽな麥藁がなんになる？
あの窓の莊麗な列、雄嚴な穹窿の布置
それこそ相應しい學の權威の説かれる大伽藍！
最高學府の學生が、希望に輝く彼徒が
偉大な科學の道を拓いてゆく殿堂だ
あの宏やかな白堊に居並ぶ學者の肖像
御覽、何といふ明智と氣品とが藏されてゐるか！

## 幻

あゝ風は來ないか風は、故土の微風は！
灰色に並んだ大學人の扁額……
御身達も戀しくはないか草色の風が
御身達にも、涙はあらう血はあらう
よもや忘れはしまい、若い日の夢を
煤にまみれ、息に蒸され、顰面して
だゝ廣い此の講堂を見下す爲に、その光榮（？）に
御身達は生きたのか、鬪つたのか



そして、儂の仲間の此の多勢の青年も
御身達を的に、何もかも忘れようと焦るのか？
あゝ思ふだけでも堪えられぬ、せめては、おお
吹けよ風、散らせよ愁悶！

## 影

爾のあはれつぽいその聲は
眼邊の赤い未成年者の感傷か
しかし爾の放肆な言葉の濱褻なんぞ
何して博士達の不拔な名と業蹟とを汚せよう！

意志のみが事實をうち建て、存在し、發揚する
それこそ生きること、でなくて何であらう！
その前に一切は慴伏し、禮讃する。
夢を捨てよ夢を。夢を喰ふ獸がゐるといふが
可憐さうに爾らは夢の餌食になつてゐる
それが立派な詩人とかいふならば
放蕩者、心中者、みんな天才藝術家だ

## 幻



おまへが何と言はふとも、側がどう觀ようとも
本然自然の生活こそ（夢にまれ幻にまれ）
たつた一個の人間の道――永遠の戀だ

女は美しい、生きてゐる、それこそ神が
男性の骨から創つたもの。
人間の作製つた法律に、血の氣のない條文に、
憧憬の日を裂きとり、若い生命を供げねばならぬとは！

あゝ若者！君たちは、革命の聲を聞かないのか？

君たちの疲れた額の「麵麭の爲に」といふ文字を
あゝ今、抹せ、消せ、そして「彼女の爲に！」と叫びつゝ
野に駛れ、巷に出でよ、この冷灰な殿堂から！

## 影

靜かに。鎭めよ
遁れえぬ宿業、絶對の競生だ
すべては公序ある觀念の世界だ
文献に首を埋めよ
榮ゆるであらう



愛慾に眩めよ
氓敗への途上である

## 幻

おゝ野にゆく事が、滅びの途であるならば
若ものよ、儂らはその道に駈け去らう
白い手を拉れ！
細い腰を抱き擁へよ！
山のむかふ、海の彼方……
さあ、生きむがために

亡びの國へ、劫生(こうしへ)の領土へ
今こそ慕然(しらし)に！

# 故土の聽耳

—1920—

# 故土の聽耳

—阿蘇伯海に

白き街路盡きずあり
都なり。われはわか者
かくて惱み、かくてはぐれつゝ
いづくとしなく係戀れまよひ
巷ねむる夜半の灯に涙ぬぐひあへず
荒みはてし魂は

ふとも、想ひみる
故土の聽耳

（おお故土は期待たむ
海靜かに野は平らかに
柴戸閉じ、よきひとは燈に寄れり
おお、故土は聽かむ
迫かにやさしき耳をあげて
都に送りしわか者の動靜を）
われは青年、愛慾に傷つき
嘆き、勞れ、都のはてに佇ちほゝけつゝ



ふとも、胸に泌む
故土の聽耳

# 遺涙

（遺の義は遺精の遺なり）

電車の中。すさまじい混雑
ふと出會ふ美しい眸
その輝を趁ひも得ず唇を嚙み
やがて、あつく滲んでくる私の瞼
教室の中。靜やかな緊張



ゆたかな叡智の流れでる師の唇
若い頭は何かをぢつと思ひみつめ
やがて、私の頰を零れるものがある

彼女と共に。犯されない二人の時
をんなは媚び踊り燃えあがり
微笑み、抱きかはし乍ら、ふと惧れて
『あら、あなたの眼は濡れてるわ』

さみしくはない筈

かなしくもない筈
私は健かな理想主義者
――友たちは私の涙を不思議がる



# 野の胎教

『君よ野は孕めり』

散歩路(プロメナーデ)の紆り盡きし時微風(か)あり
そのかせに、歩み疲れて寄りそひし
愛人の靴(つ)きさゝやきは
はたと、とりあひし双の胸先を脅かしぬ

『君よ、野は孕めり』

五月なり。野は陽に匂ひ風を生み
熾んなる葉緑に洽くむせかへれり
あゝ、野も愛人とともに母胎なる女性！
われは再度の耳語に血を搖りぬ

『あゝ君、野も姙りぬ』

おゝ、野を孕ましむるは何？



君が双掌を羞ゆげに汗ばましむるは何？
まゝよ春なり今は。君。わが若き肩に凭り
涙を堪えてひそやかに聽かずや、野の歎へ！

# 贈物

——ある夫人に——

あなたはそれを内衣嚢に
または細いくぼみのある胸の央に
肌ふれに藏つてをいてもいゝ
またはあの露細亞更紗の卓布の上か
暦のしたの散らされた文箱の上かに
露はに忘れてをいてもいゝ



置かれたときの此の贈物のまづしさを
わたしはいちばんによく知つてゐる
けれどもつとよく知つてることは——
あなたの纖い指にとられこの先端が
あなたの情愁の燐寸に點火されて
渦去わすれがちな双の唇にはさまれつゝ
吸はれるとき、そう、あのやうに吸はれる時
初めて、あなたは、仄かに、感ずるでせう
わたしのこゝろ切なる匂ひを

思ひ籠めたあじはひを
失はれたあの日へ懷ひ返すさゝやきを
藍色の烟にとけこんだ淡やかな執念を

あなたにとつては莨であるわたしの詩
エヂプトに產るやうな薰高い葉卷
（今夜がいゝ）それをあなたへ贈ろうとおもふ



# 昧爽の月

祈の門は閉さるゝとも
涙の扉はとざされまじ　＝希伯來古諺＝

めしひたる若さの夢の
醉勞を堪へつゝ二人
さなり、ふたりのみ
寄りそひて引きあけし窓
ふとも瞥し

月

かたみに摘りし
禁斷きびしき樹の果實
――あゝいまやみとせ
こゝろは杳かかの更をまさぐり
獨りおびへつゝ思ひぞよる
ありし日の
おゝ、月



月は似たり今に
人こそはかはりゆけ
嗟乎わが悔ゆる心ひとすぢ
月に、ひとに
ゆるさるゝは海禱か
あらず、たゞ
涙か

## 撰

かの友のいへる
「わが歳は復たおとのはじ
われ日を紹ぎて書をよまむ」

僕かへりて惟へらく
「あゝこのこゝろ！」



この朋のいへる
「とはに返らぬわかき日を
われ娯しまむ身を擧げて」

僕かへりて謂へらく
「あゝこのこゝろ！」
（はたとせを經ぬ）

かの友は家榮えて
うはべに温顏あり

この朋は獨り衰へ
おもてに孤影漾ふ

あゝ若き子よおんまへに
今撰ぶべき二つあり

# 日本アルプス韻律

—1919—

（柳澤健氏に）

# 日本アルプス韻律

## I　梓川牧原に沿うて

梢に沿うて陽はかげり、尾根を傳ひて影はふくらみ、撫でては駛り、蔽ひてははどけ、光の亂舞いま極りて、銀のひとすじ、さふさふと朗らに深く、下る　流る　その水のほとり、若ものゝむれ、沿ひつゝ歩み慕ひゆく、あゝ、美しい名よ、おまへあづさ川！

（あの日結ばれたふたり
きみよ今いづこに――）

振りかへるかの山脈の、萬年の雪の襞　底しれず絶えな
く解けて、落つる冷たさ麗しさ、岩に寄りては黄金にし
ぶき、淵に澱みて空を浮べ、紡ぎ、ほころび、追ひ縋り
呼びかはしつゝ、思はせぶりの岩魚の銀に、水切る腹を
載せてゆたかに　杳かに　ああ　慕はしい名よ、お前梓
川！



（あの日のおもひでは
はづむ乳ぶさに――）

針葉樹林　影碧く、潤みがちなる幹の列、きらゝかに
いつせいに、葉なみは震ひ、愼しき哄笑、見よ　雪より
風は吹き下り、常冬の領の小花たち、あえかにしみらに
默頭き　歡語き、羊ら牛の群、放牧の怡しさは、斑らに
めぐり、莖を嚙みては鳴きかはす、ああ、爽かな名よお
前梓川！

（あの日の雲は散ります
あなた、さあ唇を――）

流れに沿ひてはろばろと　なだらに下る、光の巷、陰翹
の國、幻きらふ稚き日の、饗宴の酔ひに旅人ひとり、群
を離れて、いづくとしなく憬れ迷ひ、白樺の皮の乳いろ
剝ぎとりて汗ばみ握り、草笛折りつゝ、紆る流の奔るが
まゝに、濡るゝ涙　充つる微笑　都におきし愛人に　送
るは思情――



（あの日の夜は近寄ります
あなた、さあ歌を――）

歩みに搖れて、縺れむらがり沈みゆく、光、陰、闇に溶
けゆく慌しさは、峯のくぎり、樹々の濕り、黝ずむ雪の
膚より、ゆらゝゆらゝ、あゝ泛ぶ月輪、くちなし色は仄
かに漂ひ、さやかに今は、ひと筋明き蠟の流れ、垂るゝ
柳にあてどなく、はねる水　消える泡、おくる思ひは――
――涯しなく。

## II 燕岳に與ふ

慕ひ寄る若ものゝ、旅に疲れし双の顳顬、汗ばみあかく、
谷より昇るよ七月の微風
快よし
永世の雪を手握り嚙みつゝ、ああ今振りかへる汝が姿つ
ばくろ岳！

（悅びか、然なり、哀しみか、然なり、汝を見し胸



の解けえねば、結ぼる思慕、縋るる離情）

爽かに浮ぶ、肌の土は代赭の線、葉のみどり、雪國の小
花は翳す紅、白、黄、眞陽にかゞよふ銀の雪條、陰翳の
紫紺、弓なり碧き大穹窿に、明く朶雲の壁畫――譬ふれ
ば、七つの彩絲織り紛ぐ、南歐の童女か、ああ汝が姿、
つばくろ岳！

（ときめきか、然なり、涙か、然なり、汝を見し心
忘れねば、積もる憧望、去りゆく旅愁）

思ひ暮れつゝ今はゆく若者の、旅の行手は雲多し途は遙
けし、いつの日か又見む、汝が雪に印けしわが足形消ゆ
るとも、よき谿風にふり仰ぎ、帽を振り惱みしわが胸内
永劫にほゝゑめ！
あゝさらば片照りの汝が横顔、つばくろ岳！



## III 雪滑りの詩

雪。雪。雪。一めんの雪
その眞中に立ち並ぶ若者たちは今
双手を擧げて呼ぶ、ゲットセット！
發矢！杖を緩めて反りかへる息
と、じわじわと雪のすべる音
薔薇いろの陽に接吻されて
醉ひとけた雪の歡聲！

おお、私の肉は浮き上つた
滑る、滑る、今は滑る
おお、私の心は燃え飜つた
辷る、辷る、今は辷る
すべりゆく肉と心の亂舞
それにはじけ散る雪の炎
脚にたぎりたつて胸をかすめ顏に煌めき
紅の陽光に溶け散る黃金と白銀

滑る、滑る、今は滑る



「瞬間の不斷の撫擊」につれて
O! Lo! 眺めは去る、上る
山は消え去る、僕らの山は遠く
Adieu! Adieu! 鎗ヶ岳!
私は帽をあげ振りかへつて呼ぶ
消え入ろうとする鎗の穗先
朱く照るよ麾くよ七月の午前の陽
漂泊の日のマルスのやうに
ああ今は離る遠く遠く雲の彼方……